



## 第4回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北野, 健一, 金田, 忠裕, 井上, 千鶴子, 櫻井, 健二, 古澤, 修一, 増田, 士朗, 安原, 智久, 山口, 博之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00007584">https://doi.org/10.24729/00007584</a>

# 第4回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ 開催報告

北野健一<sup>\*1</sup>, 金田忠裕<sup>\*2</sup>, 井上千鶴子<sup>\*1</sup>, 櫻井健二<sup>\*\*1</sup>,  
古澤修一<sup>\*\*2</sup>, 増田士朗<sup>\*\*3</sup>, 安原智久<sup>\*\*4</sup>, 山口博之<sup>\*\*1</sup>

A Report on the Fourth Workshop of Teaching Portfolio

Ken'ichi KITANO<sup>\*1</sup>, Tadahiro KANEDA<sup>\*2</sup>, Chizuko INOUE<sup>\*1</sup>, Kenji SAKURAI<sup>\*\*1</sup>, Shuichi FURUSAWA<sup>\*\*2</sup>, Shiroh MASUDA<sup>\*\*3</sup>, Tomohisa YASUHARA<sup>\*\*4</sup> and Hiroyuki YAMAGUCHI<sup>\*\*1</sup>

## ABSTRACT

大阪府立大学工業高等専門学校は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、2010年1月には第2回目、8月には第3回目、2011年1月には第4回目となるティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催し、現在常勤教員78名中27名(35%)がティーチング・ポートフォリオを作成しており、作成率は日本一である。本稿では、第4回ワークショップの概要について説明した後、ワークショップ参加者の感想をメンティー・メンター双方の立場から述べる。また、ワークショップ後にメンティーに対して実施したアンケートの結果もあわせて報告する。

**Key Words:** teaching portfolio, faculty development, mentee, mentor

### 1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ（以下、TPと略す）作成ワークショップ（以下、WSと略す）を開催した<sup>[1]</sup>。2010年1月には2回目<sup>[2]</sup>、2010年8月には3回目、2011年1月5～7日には4回目となるTP作成WSを開催し、2011年5月現在常勤教員78名中27名(35%)がTPを作成しており、作成率は日本一である。本稿では、第4回TP作成WSの概要について記し、WS参加者の感想をメンティー・メンター双方の立場から述べる。また、WS後にメンティーに対して実施したアンケートの結果もあわせて報告する。なおTPについての詳細、特徴等については既報<sup>[1,2]</sup>を参照されたい。

### 2. ワークショップの概要

第4回TP作成WSのおもなスケジュールを表1に示す。スケジュールは、第2回、第3回と少しずつ修正されてきたが、検討の結果、第4回は第3回とまったく同じとした。ほぼ固定化されてきたと言ってよいであろう。

今回のWSでは第1回でTPを作成した6名のうち4名と、第2回でTPを作成した8名のうち3名がメンターとなった。それ以外に第1回TP作成WSでもメンターを務めた2名と、学外からメンター兼スーパーバイザーとして1名の計10名がメンターとなった。初メンターは2名のみで、残りの8名は2回目以上のメンターとなった。メンター兼スーパーバイザーには、第2回TP作成WSでもお務めいただいた東京農工大学・大学教育センターの

表1 第4回TP作成WSのおもなスケジュール

	1月5日	1月6日	1月7日
午前		個人メンタリング(2) TP作成作業	個人メンタリング(4) TP作成作業
午後	オリエンテーション 個人メンタリング(1) TP作成作業	個人メンタリング(3) TP作成作業	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 TP作成作業	夕食会 TP作成作業	

2011年8月22日受理

\*1 総合工学システム学科 一般科目  
(Dept. of Industrial Systems Engineering : Liberal Arts)

\*2 メカトロニクスコース  
(Mechatronics Course)

\*\*1 秋田県立大学  
(Akita Prefectural University)

\*\*2 広島大学  
(Hiroshima University)

\*\*3 首都大学東京  
(Tokyo Metropolitan University)

\*\*4 摂南大学  
(Setsunan University)

加藤由香里氏にお願いした。一方、メンティー (TP 作成者) は本校から 5 名と学外から 5 名 (秋田県立大学 2 名, 広島大学 1 名, 首都大学東京 1 名, 近畿大学 1 名 (所属は執筆時)) の計 10 名となり, 学内, 学外の比率もあわせて第 3 回とまったく同じ人数となった。学外からの参加者が定着した感がある WS となった。「3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して」の章に記載されているが, ほとんどが栗田先生ないしは加藤先生からのご紹介である。メンティーの構成を表 2 に示す。今回の特徴としては, 学内参加者が全員准教授以下であり, 前回の全員教授 (+名誉教授) の布陣から一変した。個人メンタリングは 3 日間で 4 回とし, TP の提出は 2 晩とも午前 0 時まで担当メンターとスーパーバイザー宛に電子メールで提出とした。なお, 夜の食事は任意参加としたが, ほとんど全員が参加された。

表 2 第 4 回 TP 作成 WS におけるメンティーの構成

所属	職階	在職年数 (他歴含む)	専 門
本校 5, 学 外 5	教授 1, 准教授 7, 講師 2	20 年以上 1, 10~20 年 7, 10 年未満 2	物理 1, 数学 2, 有機化学 1, 知能機械・制御工学 1, 電子 工学・物理学 1, 農学・栽培 学 1, 薬剤師教育・有機化学 1, システム制御工学 1, 免疫 生物学 1

### 3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して

櫻井健二 TP 作成のきっかけは, 平成 22 年 9 月に本学 (注: 秋田県立大学) で開催された FD 講演会で加藤由香里先生 (東京農工大学) の講演「教育改善のためのティーチング・ポートフォリオ」を拝聴したことである。講演の内容で, 教員のメリットとして「自己省察の機会を確保する」と「評価者へのアピール手段」が印象的だった。私自身にとって平成 22 年度は五年任期の最終年となり, 実績報告書の提出と教員評価を受けることになっていた。教育分野において工夫や改善を常に心掛けていたが, 実際に実績報告書を作成する際には, 改善点などを上手く表現できずに苦労した。これは表現力が不足しているだけではなく, 教育分野において改善を心掛けている「つもり」で, 本当は改善できていないのではないかと自信がなくなっていた時期でもあった。そのため, 加藤先生の「自己省察」と「評価者へのアピール」というメリットはとても興味深かった。さらに, 講演会ではどのように TP を作成するのかということで, 「集中ワークショップでメンターの助言を受けて 12~15 時間かけて作成」することを聞き, これだけ集中する意欲が自分にはあるのか, これだけ時間をかける意義があるのか, そもそもこんなにまとまった時間は取れるのか, マイナス部

分が気になり少々腰が引けたことを覚えている。

日程は年末年始休暇明けかつ授業開始前ということで, 参加しやすかった。TP 作成前の「スタートアップシート」の作成とミニワーク (KJ 法) は教育理念を整理する上で非常に役に立った。TP 作成中では, 「自己省察」の過程は労力と時間を相当注ぎ込んだが, 苦痛を感じることはなく, むしろ心地いい達成感のようなものを得られた。特に, メンターとの個人ミーティングでは得るものは多かった。日程の後半において, 教育理念・責任・方法の内容はまとまってきたが, 個々がバラバラのような感じがしていた。その時の個人ミーティングでメンターおよびスーパーバイザーからのアドバイスによって, 教育理念・責任・方法を一つにまとめることができた。TP を作成しての感想は, 期待以上の成果が得られたと思っている。TP 作成前に抱いていたマイナス部分はすべて解消され, 最終日に行ったプレゼンは「評価者へのアピール」に役立つことを予感できた。

今後の課題としては, 今回作成した TP の更新をどのように考えるかである。教育の成果や改善は学期末ごとに更新することは可能であるし, それらの更新に伴って, 教育の方法にも手を加える必要があるし, 学内での委員会や役職によっては教育の責任も変わってくる可能性がある。もう一つの大きな課題は, 学内への TP の導入が挙げられる。TP 作成に際して, メンターやスーパーバイザーに助けられた部分も大きいので, 次には私自身がメンターとなって, 学内に TP を広め, 大学全体の教育の資質向上に繋がればと思っている。

古澤修一 研究科の執行部 (教育担当) から始まり, 大学本部の教育改革の副理事として, 現在, 私は大学における教育問題の現状および今後を考えています。現状は, 大学に赴任する多くの教員は, 大学は研究機関だと考えているようです。それも, 現在の教員採用の制度を考えれば肯けます。大学教員には原著論文の数やその質, そして, 選考対象者の筆頭著者論文あるいは責任著者の数というものが, 研究指導という観点からどうしても重要になっています。しかしながら, どう考えても大学は高等教育機関です。大学は, 教員が人材を養成する場所であるはずで, それは, 学校教育法や教育基本法にも述べられており, また, 多くの企業が望んでいる大学卒業生像, 大学院卒業生像でもあります。しかしながら, 現状では多くの大学教員はそれを認識していません。「研究者が, その背中を学生に見せることで学生は育つ」と考えている教員も, 悲しいことにいるようです。このような中で, 大学の教育部門を改善するためにどのようなことが考えられるのか, 私は自問してみました。大学は, 世界一流の研究を用いて, 専門の知識や知恵ばかりでな

く、社会人基礎力を養う高等教育を行う場所のほずです。そして、このような意識改革を大学内で行っていくために、私は今回、大阪府立大学高専で開催して戴いたティーチング・ポートフォリオ (TP) 作成のワークショップに参加して、TP 作成の有効性を教えて戴こうと考えました。

ワークショップを通して、メンターの方から、私の内部に漠然と潜んでいた自身の教育感、教育に関する自身の責務、教育に対する理念、その方法、成果が、「どうして?」「それはなぜ?」の問答から流れるように引き出されてきました。ポートフォリオであるからして、作成後、データを毎年追加していく必要があります。また、それらのデータから、毎年、省察を行って、自分の立ち位置を修正・改善していかなければなりません。

今回、この TP 研修会に参加させて戴き、TP を作成させることは、上述した大学教員の教育に関するコンセンサスの作成をするために非常に役に立つと感じました。教員の意識改革にとって、非常に効果的だと感じました。

広島大学での教育問題の今後ですが、今回、副校長の葭谷先生からは、このポートフォリオを実質化するために FD を頻回開催したこと、また教員の中に実施をリードする小グループが出来たことが最大の成功の原因であること等を教えて戴きました。広島大学で TP 研修会を実施する際の課題として、教員への理解の深化が最初に必要なこと、また、良いメンターのチームを作成する事が最重要課題であると感じました。今年、広島大学でも TP ワークショップを初めて実施します。大阪府立大学高専で実施して戴いたようにうまく行くかどうかの自信はありませんが、とにかく、大阪府立大学高専に倣って前進してみようと考えています。

**増田士朗** TP は、所属学部の FD 部会の委員長になったときに、授業改善のためにどのような組織的な活動があるのかを調べている中で知りました。その後、インターネットで検索し、大学評価・学位授与機構の栗田佳代子先生、東京農工大の加藤由香里先生によるセミナー<sup>[5]</sup> や栗田先生と大阪府立高専の北野健一先生によるセミナー<sup>[6]</sup> を知り、栗田先生に TP について相談するようになりました。今回の大阪府立高専でのワークショップは、そのような中で、栗田先生にご紹介いただきました。

文献<sup>[3,4]</sup> や過去に行われたセミナー報告<sup>[5,6,7]</sup> から、TP を作成する意義や効果は理解しているつもりでいましたので、今回のワークショップは参加を楽しみにしており、TP の作成をきっかけにして所属学部の FD 活動や自身の教育活動の改善につなげたいと考えておりました。

しかし、実際ワークショップに参加してみると、自身の教育活動を振り返り、それらを TP の形にまとめるのは、

葛藤を伴う辛い作業であることに気がきました。大学で教育研究に携わるようになって二十数年になりますが、研究と教育のバランスをどのようにとるのか、その中でどのような指導が学生にとって望ましいのか、また、学生の興味の方向性と自分自身の研究テーマのギャップをどのように埋めるのかなど、曖昧なまいつのまにか折り合いをつけていたことに何らかの答えを迫られるような思いに至りました。さらに、できる限り学生目線に立って、わかりやすく講義するようにしているものの、教育実績として文章にしようとする、書けることが少ないことに唖然とさせられてしまいました。結局、期間中には TP はまともならず、ワークショップ終了後 1 週間に設定された最終提出の期限の日によりやくまとめることができました。

このような散々な状態ではありましたが、作成した TP は個人的に満足いくもので、その後の教育活動の改善に役立っています。まず、メンターから教育の責任から理念、方法、実行、短期・中期・長期と切り分けた将来計画の一貫した流れを意識するように指導されましたが、そのことを意識することによって、教育の責任を明確にする重要性に気がきました。このことにより、所属コースの教育理念における自身の教育研究活動の位置づけについて整理が付き、コースの将来計画に自分なりの展望を持つことができました。また、これまで行っていた断片的な教育面での工夫が自身の教育理念に基づくものであることを意識できるようになり、学生の指導に自信が持てるようになりました。さらに、その効果を教育理念に照らして客観的に評価できるようになり、改善の方向性が明確になりました。

今回の TP 作成は自己省察が中心となりましたが、次回改定する機会があれば、十分な教育実績とエビデンスをもとにした TP を作成したいと思っており、今ではそれが教育改善を試みる励みにもなっています。また、将来的には自身の TP による教育改善の実績を明確にすることで、所属する学部や大学の FD 活動の活性化につなげたいと考えています。

**安原智久** ティーチング・ポートフォリオ (TP) を知ったのは、当時の所属大学の FD 講演会である。私は医療従事者を育成する薬学部の教員として、「研究」よりも「教育」に自らの責務として重きを置いていた。それ故に、教育活動の記録を如何にしてエビデンスとして残すのかということに苦慮していた。TP はその解決方法に成りうると思ひ、ワークショップへ参加した。教育活動に関する成果を残し評価を受けるために、関連学会での発表を積極的に行っていたが、その中では、「何故、教育を行うのか?」、「何故、その方法を採用したのか?」とい

う熱意そのものを表現する機会に恵まれないというフラストレーションがあったことも参加を後押しした。

前述のとおり、私は、教育活動を中心に大学教員としての評価を受けることを目指していたので、幸いなことにエビデンスに基づいた実績の提示には苦労はしなかった。したがって、TP 作成は、どうして薬学部での教育にこだわるのか、どうして薬剤師を育成したいのか、という非常に根源的な職業的使命感への自問自答の繰り返しであった。近年は、何事も成果とエビデンスが求められるため、何を行うに当たっても理由作りが必要であり、何を報告するにしてもその意義を求められる。確かにそれは極めて重要ではあるが、その作業の連続の中で、建前作り、悪く言えば、言い訳に労力を割いている様な錯覚を覚えるのは私だけではないと思う。TP 作成のプロセスは、そういった、ある種の自己矛盾を一度リセットできるのが醍醐味であったと思う。自分の中にある、教育に関わる者としての使命を再度高く掲げなおすことができた。その様なことは日々行っているという方も多いと思う。しかしながら、メンターに聞いていただき、誰かに読んでもらうために自ら持つ教育の理念を纏めなおす過程は、日々の事務作業の中で擦り減っていく教育へのモチベーションを強く再生させた。分野が大きく違ったにもかかわらず、根気強く私の「薬学教育」を聞き続けてくださったメンターを始め、共に WS を行った先生方には深く感謝しています。

今回の WS による TP 作成は、一部で言われるように、確かに大変な負担であった。しかも、あらゆる教育機関で TP により個人の業績評価が出来る日は、今しばらく教員評価体制の変遷を待たねばならないだろう。TP を導入する目的によっては、簡易版 TP のようなものがあつた方が組織全体としては効果的なケースもあると思うので検討していければと考えている。それでも、今回作成した TP は、これまでの教育への有形無形の成果の結晶である。今でも WS で作成した TP を開けば、教育への使命感が沸いてくる。TP を書いたという事実が、より良い教育を行う原動力になることは間違いないと確信している。

**山口博之** ティーチング・ポートフォリオ (TP) を認識するようになったのは、加藤由香里先生 (東京農工大学) の『教育改善のためのティーチング・ポートフォリオ』という講演 (秋田県立大学 2010 年秋) を聴講したのがきっかけである。私も研究と同等以上に教育という仕事が好きで熱意を持って自分なりに改善を続けてきていたが、これまでのそれは系統だったものというよりはある程度勘に頼った工夫の積み重ねであった様に思う。TP 作成が教育改善に高度に有効で、さらに教育業績評価への大きなアピールにもなり得ることを知り、今回のワー

クショップへの参加を希望した。

参加してまず感じたのは主催された大阪府立工業高等専門学校の先生方の教育への並々ならぬ意気込みである。ワークショップでの受講者に対する指導はもとより、夕食会での議論もとても熱いもので強い刺激を受けた。さらに校長先生を初め管理職の方が理解を示し現場に足を運ばれたこともすばらしいと感じた。また教育に対する強い熱意をにじませながらも TP に対しては懐疑的というか異なる視点からの考えをお持ちの先生もいらして、自由で飾らない率直な発言をされていた。先生方が教育に対し各々で深い考えをお持ちであることを感じた。

実際の TP 作成において担当メンターの先生からは、理念を大事にした (意識した) 書き方を指導していただいた。これにより比較的スムーズに作成作業が進められたように思う。TP 作成の指導を受けることで、いままでは漠然と「こうするとよいだろう」と行なってきた、講義・指導への工夫・改善が、実はどのような目標に沿っていたのかを強く意識できるようになった。そのため、今後なすべき方向性が浮き彫りとなり、やるべき作業が具体的にわかるようになった。TP 作成のよさは、メンター指導の下、作成を進める手順が系統立てられていることにもあると思う。従って、適切なメンターの下で TP 作成作業を手順に沿って行えば、授業改善への道筋が自然と見えてくるように思う。今回はさらに教育業績を評価する側からの観点もまじえて指導していただいた。通常期待されている以上に取り組んでいることをエビデンスとともに具体的に記すことなど、評価者にアピールできる TP 作成のヒントを得られたことは今後役立つと思う。ワークショップ仕上げのショートプレゼンでは、種々の教育機関からの参加者による発表を聞き、強い熱意と教育・指導方法へのユニークな工夫を知って参考になった。

繰り返しになるが結論として、TP 作成が教育改善に高度につながるのには確かであろう。一方、実際の作業の負担を考慮すると作業は敬遠したいと感じる教員もいるかもしれない。だが、TP 作成は自らの教育パフォーマンスの向上はもとより、教育業績のより正当な評価へつなぐと強く期待できるので、実行する価値は大いにあると言える。

最後になりましたが、今回お世話いただいた大阪府立工業高等専門学校の皆様、ありがとうございました。

#### 4. メンターを体験して

**金田忠裕** 本校における TP 作成ワークショップも 4 回目となった。この度はメンターとして薬学教育に携わる私立大学の准教授の担当となった。専門分野が異なると知らないことばかりであり、最初の個人メンタリングは

緊張しておこなったことを記憶している。

本校も技術者育成という責任を担っているが、薬剤師養成の責任の重さを痛感させられた次第である。また、技術者も一人で仕事をするよりはプロジェクトチームで仕事をすることが多いが、薬剤師もチーム医療という形態でチーム仕事をするのが多く、コミュニケーション能力や問題解決能力が必要になることを認識した。

さらに模擬患者の育成も時間をかけておこなっているなど、薬学教育について熱く語っておられ、短い時間ではあったが非常に心地よい時間を過ごすことができた。

医学系特有の授業方法も紹介していただき、非常に参考になることばかりであった。

作成者の想いをどこまで TP に盛り込むことができたかどうかはわからないが、ご自分の教育活動を振り返ってみて、TP という形態で整理することはできたのではないかと感じている。

TP の作成が今後の薬学教育の参考になれば幸いである。

## 5. 事後アンケートの結果

ワークショップ終了後、メンター10名に記名式のアンケートを実施した。7名から回答が得られた。表3にアンケート結果の一部を示す。

表3 事後アンケート結果 (一部抜粋)

<p>5. ワークショップのスタッフについて</p> <p>(1)メンターからの助言は役に立った (そう思う 5名, どちらかといえばそう思う 2名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)</p> <p>(2)メンターは学内メンター以外に学外メンターも必要である (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 3名, どちらかといえばそう思わない 1名, そう思わない 0名)</p> <p>(4)担当メンターについて、ご意見・ご感想をお聞かせください。 ○あまり TP にだめだしされなかったんですがよかったですか? とりあえず、話をしまくっただけの気がします。慣れていない作業のため、もう少し具体的な提案があってもよかったですか? という感じがします。TP は何でもいのであがゆえに若干最初は取っ付きにくいですが、もう少し、良いなら良い、悪いなら悪いとコメントが欲しかった気がします。 ○私の担当メンターからは、管理職側からの教育業績評価書に関する観点もまじえて TP 作成の指導をしていただきました。私が教育改善に利用したい、また、業績評価に役立つ報告書作成について知りたい、という動機から TP 作成ワークショップに参加したので、評価する側から見た TP 作成注意点について知識が得られたのはとてもよかったです。また TP 作成において、まず理念を大事にした書き方を指導していただいたので、私としてはスムーズに作成作業が行なえたと思っています。二日目の夕食意見交換会で TP も含めた教育に関するお話を沢山うかがおうと思っていたのですが、私が体調不良で参加できず残念でした。まだどこかで、いろいろ教えていただける機会があれば願っております。どうもありがとうございました。 ○アドバイスが分かりやすく、考える余裕を与えてもらいながらメンターリングしていただけたので、良かったと思います。 ○最初に KJ 法による教育理念の洗い出しから始めたこともあり、スタートアップシートがあまり有効につかわれず、また、お話しする時間も十分に取れなかったのが残念でした。 事前にも 1 回スタートアップシートに対するコメントをいただいていたので少し状況は違ったのではないかと思います。 2 日目の午後ようやく第 1 稿ができたような状態でしたが、そのときに頂いたメンターの方のアドバイスは、大変参考になりました。「個々の項</p>
---

目がばらばらで連携がわかりにくい。」「図など入れて読みやすくする。」「理念、実践、評価、課題の関係を明確にする」など、まさしくその通りで後の修正に役立ちました。

また、最初にお話ししたときの内容をずいぶん汲み取って、熱心にアドバイスをいただけたように思います。私自身の課題についてこれほど熱くアドバイスしていただいたのは、本当に久しぶりで、学生時代に卒論、修論を指導してもらったときのことを思い出しました。

また、スーパーバイザーの加藤先生にもずいぶん、貴重なコメントを頂き、大変助かりました。

スーパーバイザーは、メンターの育成もその役割の一つと思いますが、そのような方がおられるので、安心感がとてもあったように思います。

○自身の教育理念に関して、うまく整理できていない状況であったときに、教育方法や教育の工夫などについて話を聞いてもらうことにより頭の中で整理でき助かりました。また、あやふやな中説明した内容を、整理しアドバイスをいただきより明確な理念とすることができました。ティーチング・ポートフォリオの章立てに際して、当初私は本を参考にし、それにより第 1 稿を組み立てて書いていましたが、項目の重なりによりさまざまところで重複してしまいました。A 先生には、適切な章立てのアドバイスや項目の整理について指導していただき、おかげさまでまとまったティーチング・ポートフォリオを作成することができました。

メンターに自身の考えを分かりやすいようにと考えながら話すことにより、これまでに思い出せていなかったこともどんどん思い出すことができました。これにより、自身の教育の工夫を多く取り出すことができ、より充実したティーチング・ポートフォリオにすることができました。

○外部メンターの方で初対面であったが、丁寧に対応してもらった。事前準備がまったくできていない状態であったにもかかわらず、できる範囲から進めて頂いたため、作成に関して戸惑うことはなかった。また、作成者はティーチング・ポートフォリオに対する予備知識もほとんどなかったため、かなりの外れな質問や個人的な意見を聞いてもらったが、すべてに丁寧に対応していただけて感謝している。

反対の立場だったら「書きたくないだったら書かなければいいじゃないですか・・・」と言いたくなる場面もあったと思いますが、最終的には納得して作成することができたのでメンターとして非常に良い指導だったと感じている。

○感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。最終稿を第一稿と比較すると雲泥の差があり、最終稿では、自分自身の考えが簡潔かつ的確に表現できたと思います。自分でも何となくしっくりしていない部分を何度も指摘頂き、とてもスッキリしました。恐らく、一人で考えていただけでは、たどり着けなかったところに行き着けたと思います。B 先生や加藤先生にご指摘頂くことで、自分の考え (特に教育理念) をまとめることができたと思います。

自分の TP がまとまるにつれて、メンターの存在を大きく感じるようになり、感謝の気持ちと共に、(機会があればですが)自分がメンターになれるのかどうか不安も生じました。本学で TP を導入する場合やメンターリングに関して、今後もお力をお貸し頂ければと思います。

最後に、ワークショップ中の原稿提出や最終稿、このアンケートなどの提出期限を守れず大変申し訳ありませんでした。

## 6. ワークショップの成果について

### (3)ティーチング・ポートフォリオは自身の教育改善につながる

(そう思う 5名, どちらかといえばそう思う 2名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)

### (5)ティーチング・ポートフォリオを作成してみたご感想をお聞かせ下さい。

○個人的に楽しかったのですが、消極的な人、自己反省をしない人はどういふ心情をたどるのが興味があります。最後には TP を受け入れるのでしょうか。最後まで、懐疑的なまま終わるのでしょうか。

○いままで、漠然とこうするとよいだろう、と行なってきた講義、指導の工夫、改善が、実はどのような目標に沿っていたのかを強く意識できるようになった。そのため、今後何をすべきかという方向性がかなり明確に見えてきたので、やるべき具体的な作業がわかるようになりました。私にはなんとなく TP を書けるような気にはなっていますが、もう少し何回か書き直してそれを続けていきたいと思っています。

○3 日間は非常に大変であったが、教育のことだけを考えることができる貴重な時間であった。

自分の教育活動はどのようなものに基づいているのかということは、以前はあまり意識せず、自覚をできていなかったが、それは意外と単純なものであったことに気づき、興味深かった。

OC 先生の講演や栗田先生の本で、TP がどのようなものかというのは、イメージしていたつもりでしたが、いざ作成しようとする、とても難しかったというのが一番の感想です。ただ、できあがったのを見ると、もう少し簡単にできたのではないかという思いはします。最初に目的を決めた方がよいという説明を受けたと思いますが、まさしくその通りと思います。

ただ、そのとき目的が何かについて、「教育実績のアピール」または「自己省察に基づく教育改善」のどちらかといった大きな分類だけでなく、もう少し個々の人の状況に沿った目的を探り出しのようなプロセスが必要のように思います。私の場合は、「所属コースの中で自分の教育研究活動を位置づけできるのか？」や「自分の研究分野をコースの学生に魅力的に感じてもらうためにはどのような教育改善を行えばよいか？」の答えを見つけていくことが私固有の目的だったように思います。これは書き終わった段階で明確になったことですが、書き出す前から目的を明確にすることができれば、もっとスムーズにできたのではないかと思います。○教員として 1 年目であり、しっかりとした教育理念と教育方針が確立されていなかった。しかし、今回のティーチング・ポートフォリオを通して、教育について改めて振り返ることにより、自分なりの考えがまとまりました。今後は、これまで以上にしっかりと教育に取り組めそうです。

○自分のやってきた事がどのような理念に基づいて行われているのか確認することができて、その点においては有意義な作業であったと思う。しかしその反面、現状に対する疑問や不満や問題点などを考え直さなければならなくなり、個人的には悩みが増えたり、納得のいかない部分も出てきたので良いことばかりとは思えない。

今後の個人の教育活動を行っていくうえで自分の考えをまとめていくには良い手段と思われるので機会があれば適宜更新して内容を充実させていきたいと思う。

○一言で言うと、楽しかったです。

自分自身を振り返りたいと思っても、日々の業務や学生指導に追われ、それができずにいました。しかし、今回の TP 作成を通して、ただ振り返るのではなく、ポイントを押さえながら、自己省察できて良かったです。特に、短期集中で取り組めたことが良かったです。また、エビデンス（特に学生アンケート）を整理するいい機会にもなりました。さらに、メンターからご指摘を頂くことで、考えが整理でき、重み付けをできたことも良かったです。ありがとうございました。

#### 7. ワークショップ全体について

- (1) ワークショップは全体的に満足できるものだった  
(そう思う 5 名, どちらかといえばそう思う 2 名, どちらかといえばそう思わない 0 名, そう思わない 0 名)
- (2) ティーチング・ポートフォリオの作成を同僚にもすすめたい  
(そう思う 3 名, どちらかといえばそう思う 4 名, どちらかといえばそう思わない 0 名, そう思わない 0 名)
- (3) ワークショップに参加して良かったと思われる点を、具体的に書き下さい。

○TP というものが具体的に分かった。作成手順も分かった。

○まず、大阪府立高専スタッフの、教育に対する熱い意気込みが肌で感じられました。一部の方だけでなく、私の接した全員の方がいろいろな形の思いを持っていらしたので、刺激を受けました。また皆が自由にフレンドリーに飾らずに発言されていたこと、校長先生をはじめ上層部の方も教育に対する理解・熱心さをお持ちになり現場に足を運ばれていることは、すばらしいと感じました。またなにより北野先生をはじめとした若い先生がたが、情熱を持って TP 作成配布への活動を「実行」されていることに対し、見習わなければと感じました。また他大学から参加された先生がたからもいろいろな教育の工夫に関する話を伺えて夕食意見交換会に二日目体調不良で参加できなかったのですが、そこでいろいろな先生方ともっと沢山お話したかったです。

○教育に対する姿勢の現状を考えることができた。

○所属コース内での位置付けを自分の中で明確にできたこと。

教育に関する自分の理念が整理できたところ。

課題を理念に基づいて整理できたところ。

TP について理解が深まったところ。

多くの方と出会い、ゆっくりとお話できたところ。

○教育について振り返ることができたこと。

他の先生方の、ティーチング・ポートフォリオの概要発表を聞くことにより様々な考え方や教育方針があることを知れたこと。

自身にも生かせるような教育の工夫も開けたこと。

○第三者の意見としてメンターの指導を受けることができた事。

特に外部メンターだったので、客観的な意見として素直に聞くことができた。

プレゼンを通して自分の教育理念および方法について第三者の意見を聞くことができた事。

○TP を作成できたこと。TP を実際に作成することで、自己省察と教育改善の手がかりを見つけられました。また、機会があれば、自身の教育に関する考えをプレゼンするときに役立つことを実感しました。

ネットワークが広がったこと。スーパーバイザーや担当メンターだけではなく、大阪府立高専の先生方や他大学の先生方と繋がりができ、教育に関する話ができたことが、とても有意義でした。自分のプライスレスな財産が増えた感じがします。

#### 6. おわりに

本稿では、2011 年 1 月 5～7 日に行われた第 4 回 TP 作成 WS にメンティーとして参加した 5 名と、メンターとして参加した 1 名の感想を記した。本校では 2011 年 8 月 10～12 日に、第 5 回目となる TP 作成 WS を行い、TP 作成者が 36 名 (46%) となった。WS の開催にあたっては準備、当日の運営、後片付けに至るまで、ほぼマニュアル化されており、多大な負担なく運営できるまでになっている。

第 6 回の TP 作成 WS は 2011 年 12 月 26～28 日に開催予定である。この原稿がこれから TP を作成する諸氏の参考になれば幸いである。

#### 謝辞

本ワークショップは、文部科学省公募事業大学教育推進プログラムによる支援を受けて実施した。関係各位に対し、ここに謝意を表する。

#### 参考文献

- [1] 北野健一, 中谷敬子, 金田忠裕, 和田健, 井上千鶴子, 伊与田功, 葭谷安正, 藤原徳一: 日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して, 大阪府立工業高等専門学校 研究紀要 第 43 巻, pp. 63-70 (2009) .
- [2] 北野健一, 河野 学, 西岡 求, 君家直之, 土井智晴, 早川 潔, 東田 卓, 中田裕一, 中谷敬子, 井上千鶴子, 金田忠裕, 葭谷安正: 第 2 回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告, 大阪府立工業高等専門学校 研究紀要 第 44 巻, pp. 63-70 (2011) .
- [3] ピーター・セルディン著, 大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳: 大学教育を変える教育業績記録, 玉川大学出版部 (2007) .
- [4] 土持 ゲーリー法一著: ティーチング・ポートフォリオ—授業改善の秘訣, 東進堂 (2007) .
- [5] <http://www.seminarhouse.or.jp/fd/index.html>
- [6] <http://www.he.oita-u.ac.jp/fd/2009/fd090730.html>
- [7] <http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/newfd/katsudou/fdsseminar/2010sd-fdseminar/sd-fdseminar-masuda.pdf>.